

天上の雪原と地上の夜空に散りばめられた星々

—宮沢賢治「鳥の北斗七星」小考—

中井 悠加

1 はじめに

宮沢賢治による「鳥の北斗七星」は、数少ない彼の生前発表作品のひとつである。「軍隊を正面からあつかった作品である」¹と評されることがあるように、戦争や軍隊に関係するようなモチーフが多く用いられていることが大きな特徴のひとつである。また、その発表時期が2つの世界大戦の間であることから、その「軍隊を正面からあつかった」性格は強調される形で読む者の心をひきつけたのだろう。その中の1人が、第二次世界大戦において特攻隊として命を落とした佐々木八郎であり、彼は「鳥の北斗七星」を読み、大尉と自分自身の境遇を重ねることで、自分の戦う意味を見いだそうとしながら手記を残した。その手記が収録されているのが、『きけわだつみのこえ—日本戦没学生の手記』（1959年、光文社）である。その中で佐々木は、大尉の祈りを「愛」と“戦”と“死”という問題についての最も美しい、ヒューマニスタックな考え方²と捉え、「世界史の発展」³のためどの国もが積極的に戦い抜くことの重要性を綴る。

「鳥の北斗七星」研究は、その佐々木の手記から出発したといっても過言ではないだろう。それはこの作品が〈戦争文学〉のひとつであると捉える大きな流れを作り出す一方で、これが〈戦争文学〉かそうではないか、という議論も同時に生み出してきた。近年では、そのどちらが正しいかということではなく、〈戦争文学〉としての読みとそうでない読みとが並列していること自体が最大の特徴であるとする論も生み出されている⁴。本稿では、そうした先行研究を踏まえながら、読む中で生じた疑問にひとつずつ取り組むことで、今この時にわたしが読むことで現れてきた「鳥の北斗七星」を形にすることを試みる。そして最後にその読みの過程を追い、そこに立ち現れる〈文学教室〉のアナロジーを明らかにすることを目的とする。

2 隠れた人間の姿

「鳥の北斗七星」の主な登場人物は鳥と山鳥という自然界の動物たちであり、『注文の多い料理店』所収の童話に多く見られるような、動物たちと人間たちの直接的な交流はない。しかし、直接的ではないものの、ここには人間が登場する場面が2つ存在している。

1つめは、序盤の「一人の子供」として人間が登場する場面である。その後に展開される鳥たちの戦い、大尉や許嫁の思いなどとはほぼ無関係のようにさらりと流してもおかしくないほどの印象の薄さであるが、この場面にははっきりと人間の姿が描かれていることだけは確かである。この「一人の子供」は、「鳥の年齢を見分ける法を知らない」ために大監督の偉大さを分かっていない存在として登場する。鳥からしてみれば、その「子供」は明らかになく（無知）であり（無垢）であろう。け

¹ 大島(2003)p.1

² 佐々木(1959)p.93

³ 佐々木(1959)p.93

⁴ そのひとつが、安藤(1997)である。

れどもこの描写では、鳥たちの認識とその「一人の子供」、つまり人間との認識が全くずれていることを示すのみで、すぐに次の描写へと視点はうつりかわり、「一人の子供」はそれ以降登場しない。このように、一読したのみでは、この物語における必要性すら疑ってしまうような描写がところどころに見られることも「鳥の北斗七星」の特徴のひとつである。このような〈戦争〉と強く結びつく描写とそうでない描写との落差が大きいことが、冒頭で述べたような議論を生み出す魅力だといえるだろう。そのような謎のひとつが、次の描写である。

雲がすっかり消えて、新しく灼かれた鋼の空に、つめたいつめたい光がみなぎり、小さな星がいくつか聯合して爆発をやり、水車の心棒がキイキイ云ひます。

たうとう薄い鋼の空に、ピチリと裂罅がはひつて、まつ二つに開き、その裂け目から、あやしい長い腕がたくさんぶら下つて、鳥を握んで空の天井の向ふ側へ持って行かうとします。鳥の義勇艦隊はもう総掛りです。みんな急いで黒い股引をはいて一生けん命宙をかけめぐります。兄貴の鳥も弟をかばふ暇がなく、恋人同志もたびたびひどくぶつつかり合ひます。

いや、ちがひました。

さうじゃありません。

月が出たのです。青いひしげた二十日の月が、東の山から泣いて登つてきたのです。そこで鳥の軍隊はもうすっかり安心してしまひました。

（「鳥の北斗七星」以下、引用はちくま文庫『宮澤賢治全集』による）

この場面は、戦闘の前日という彼らの大きな不安を描き出したものとしては確かに物語との関連は強いかもしれないが、そうした単なる心理描写にしてはあまりにも強烈のように思われる。ここに、何らかの強い意味を感じざるを得ない。安藤恭子(1997)は、この文章の中に「ねじれ」があると指摘する。そのねじれの中に、2つめの人間の存在が隠されているのである。

53 軸棒はひとばん泣きぬ凍りしそらピチとひゞいらん微光の下に

54 凍りたるはがねの空の傷口にとられじとなくよるのからすか

55 不具なる月ほの青くのぼるときからすはさめてあやしみなけ [り]

（歌稿[A] 明治四十五年四月）

以上の短歌は、賢治の作であり、「鳥の北斗七星」の初稿が大正十年であることと考え合わせると、この短歌をもとに先の文章が書かれたと判断することは間違いではないだろう。上に引いた部分の描写によってもたらされる像と、この三首に描かれた世界の像は極めて似通っている。この三首から見る「ねじれ」について、安藤は以下のように分析する。

まず短歌を見ると、北極星を中心とした天動説的世界一宇宙観が示される一首目では、視点となる人間が自然科学的視点をわざとずらして、人間の世界一宇宙観を相対化しつつ、ある〈不安〉が表出されている。二首目には、その〈不安〉な状況の中に、その状況にふさわしい身振りとともに「からす」が類推的に見いだされる。三首目には、〈不安〉な状況・「からす」が、ともに確定的なものとしてとらえられ、あたかも鳥の視点から状況がとらえられているかのように一つまり擬人法的な力が作動している。このように、これらの短歌には一首ごとに異なる

言語状況がありながら、人間の自然科学的視点があくまで前提となつて、それが鳥へとずらされていく過程—すなわち擬人化されていく過程が連続的に展開していると言える⁵。

つまり、この短歌を三首並べて見ることによって、隠された人間の姿が浮き上がってくるのである。私たち人間は、夜空の星が動くのは地球が動いているからだという〈地動説〉を持っており、それゆえに「水車の心棒（短歌では軸棒）」を比喩として用いながら「北極星を中心とした天動説的世界」が立ち現れるところに異化作用を感じる。それに対して「鳥の北斗七星」はこうした「〈人間の自然科学的視点を前提としたずらし〉という操作を経ず、あくまで鳥自身によって見られた〈幻想〉として世界を提示する」⁶と安藤は述べる。鳥たちは、〈ずらし〉が行われた後の世界、つまり「天動説的世界」がこの世界そのものであると認識しており、人間が感じるような異化作用は感じ取ることもなく、人間から見ればそれが〈幻想〉の世界だということにすら気づかない。つまり彼らを、〈地動説〉を持っていない存在として暗にここで強調しているのである。そしてその強調は、〈ずらし〉の操作の消去によって見えづらくはなっているものの、〈地動説〉を持つ人間の視点と並べられることによってしか成立しない。鳥たちは、〈地動説〉を持たない者として、人間に比べると〈無知〉な存在であることが明らかである。序盤でさりと「一人の子供」の〈無知〉を示していたが、実は人間という〈無知〉ではない（＝〈地動説〉を持つ）存在をあえて〈無知〉と見なす鳥の姿を示すことによって、逆に鳥たちの〈無知〉を際立たせるような構造となっているのである。

先ほどの三首の短歌を比較した安藤自身は、〈ずらし〉の操作が消去されることで「鳥独自の文化」が語られながら鳥が「股引」をはいたりするような擬人法も同時に成立するという、「鳥の北斗七星」が全体的に持つ構造にはある「隠蔽」が存在すると指摘する。つまり、その構造は「自然界の食物連鎖に組み込まれたものの〈宿業〉と「人間世界の戦争」の並列を意味しており⁷、本来は〈自然〉なものではないはずの人間の戦争を、鳥と山鳥という動物界の現象におきかえてあたかも〈自然〉なものにしてしまっているという主張である。

これだけを見ればその〈自然化〉によって戦争の政治性が隠されている、ということをも痛烈に指摘したものとして読めるかもしれない。しかしここで浮かんでくる疑問は、本当に鳥と山鳥の戦いは〈自然〉なものとして描かれているのかどうかということである。

3 戦いの不自然さ

動物界には確かに、食物連鎖という名の戦いが存在する。食物連鎖という枠組みに関連するものとして鳥たちの戦いを捉えた箇所としては、戦いが終わった後の「鳥の新しい少佐は、お腹が空いて山から出てきて、十九隻に囲まれて殺された、あの山鳥を思ひ出して、あたらしい涙をこぼしました。」という一文が挙げられる。安藤はそこに、「自然界の生存競争」⁸としてその自然さがあっさりとは表明されていることを指摘する。

しかし、この一文こそが、彼らの戦いが本当に自然なものなのか、という疑問を呼ぶ存在なのである。「お腹が空いて」ということばの柔らかさは、戦いと無縁さを物語る決定的な効果を持つ。つまり、鳥の大尉にとって、山鳥が「お腹」を「空」かせていたということは彼らの戦いにとって

⁵ 安藤(1997)p.16

⁶ 安藤(1997)p.16

⁷ 安藤(1997)p.17

⁸ 安藤(1997)p.17

大して問題ではないということ、つまり山鳥が〈食料を奪いに来た存在〉だと認識されているわけではないことを意味する。ましてやどちらかがどちらかに食べられてしまうという関係でもない。実は鳥にとって山鳥が持つ脅威とは、単に〈自分たちを攻撃してくるかもしれない〉という推測それのみなのである。そうした種類の恐怖を持っていることは、許嫁が見た恐ろしい夢にも現れており、さらにその夢の中で山鳥は、「鼻眼鏡などをかけて」「ピカピカする拳銃を出していきなりずどんと大尉を射殺し」と、やけに鳥にとっては現実味のない襲い方をしてくるということもそれを物語っている。

つまり鳥たちは、食料を奪い合う競争、もしくは食うか食われるかという競争、つまり食物連鎖の只中であって山鳥を殺したのではなく、理由は分からないが自分たちを殺すかもしれないから、攻撃するかもしれないから、山鳥を殺すのである。殺さなければ殺されてしまうから、殺す。それは結局、自分の身、自分の仲間の身の安全のための戦いであり、戦いのための戦いなのだという非生産的な構図を浮き彫りにする。その戦いがさらに戦いをうむことで、永遠に戦いは続けられてしまうということには思いが及ばない。大尉が何よりも自分の身や仲間、特に許嫁の身を最も大切にしているということは、眠れないあの夜に、まず「マヂエル様」を見上げるのではなく、許嫁の眠る柱に目を向けることから分かる。鳥の大尉が恐れていること、悲しんでいることは、何の罪もないと思われる「憎むことのできない」山鳥を殺めてしまう自分自身の罪深さではない。そうした構図を持つ、憎まれてもいないのに殺されかねない世界である。殺されるのが怖い。殺されない世界に行きたい。その欲望を叶える術を知らない大尉は、だからこそ空で自分たち全体を超越した存在として輝く星に祈り、全ての責任を星に背負わせながら救いを求めるのである。

4 大尉の祈り

ここで焦点化されてくるのが、以下の引用のように戦いの前後でなされる大尉の祈りである。

あゝ、あしたの戦でわたくしが勝つことがいゝのか、山鳥がかつのがいゝのかそれはわたくしにわかりません、たゞあなたのお考のとほりです、わたくしはわたくしにきまつたやうに力いつぱいたゝかひます、みんなみんなあなたのお考へのとほりです

あゝ、マヂエル様、どうか憎むことのできない敵を殺さないでいゝやうに早くこの世界がなりますやうに、そのためならば、わたくしのからだなどは、何べん引き裂かれてもかまひません。

この2つの祈りは、千田洋幸(1998)が「〈運命〉への思いと一体となった〈自己犠牲〉という、あらゆる読者を拝跪させてやまない超一倫理的概念」⁹とるように、美しい存在として読まれてきた、そして最も中心的に論じられてきた存在である。むしろ、千田が指摘するように、この物語の中で最も前面に出されているもの、読者の中で強く喚起されるのは、「マヂエル様」という自分たちを超越する存在に対するこうした鳥の大尉たちの絶対的な信仰心、裏を返せば依存のような観念、倫理観であるといえるだろう。そのように考えると、この「鳥の北斗七星」は、戦争や、もっと言えば日本が大正から昭和の時代にかけて体験した世界戦争を「正面から取り扱った」ものとしてではなく、それを素材とすることによって、何か自分たちを越える絶対的な存在に対する強い信仰とその

⁹ 千田(1998)pp.75-76

裏にある依存、そしてそれによる行動停止の危うさに向き合うように指し示したもののように思う。そして当然、大尉自身はその依存と停止に気づいている訳ではない。

そもそも、星に願うことで大尉の願いはいつか叶うのだろうか。彼の祈りは「マヂエル様」一星¹⁰に届き、この無意味な戦いの連鎖は止められる日が来るのだろうか。戦いの連鎖とその苦しみを誘発しているのは、他でもない大尉たち自身の行動そのものである。「マヂエル様」は戦いを望んでもいないし、その終わりを決定する存在でもない。星は、祈っても何もしてくれないし、そもそも地球の生物の行動に対して直接意志を持つものではない。

星が、直接的に鳥たちに何かを及ぼす存在ではないにも関わらず、大尉は自分たちの戦いの理由を〈「マヂエル様」のおぼしめし〉だとすることによって、戦いを生む直接の原因である自分たちの〈殺されたくない〉という欲望を隠し、あたかも戦わせられていると言わんばかりに「マヂエル様」に責任転嫁してしまう。しかも、その負の連鎖の終わりですら、「マヂエル様」に一任するのみであり、根本的には何の解決にも向かわないまま彼らの物語は閉じられる。つまり、知らず知らずのうちに〈自己犠牲〉という一見美しい観念で覆われることで、大尉たちの殺されることへの恐怖という本心と、その〈責任の転嫁〉こそが、隠蔽されているという構造を生み出す。

安藤は、大尉の祈りに出てくる「この世界」について、以下のように述べる。

この祈りの中で、最も分かりにくいことは何か。それは、「この世界」が指し示す意味内容である。それは、人間の「世界」なのか、鳥の「世界」なのか、それとも、人間も鳥も、生きとし生けるものがすべて同等に普遍的に存在する「世界」なのか。しかし、そんな「世界」がはたしてあるのだろうか¹¹。

彼女のこの疑問と、先のことを考え合わせると、大尉の述べる「世界」とは、安藤がその答えの候補として以上のように並べているようなカテゴリー化されたものではなく、かといって「生きとし生けるものすべて」などといった大きなスケールのものではない。ただ、鳥の大尉自身が見ている世界、そしてそれを同じ視点で共有しているだろう大切な許嫁や義勇艦隊の仲間の世界という、限りなく彼の主観に近い「世界」である。それは、ともかく自分たちだけが生き残ればよいという一国主義的な偏ったもののようにも見えるかもしれないが、そこにはそのような〈悪意〉は決して存在しない。その反対に、大尉は〈善意〉からこのような行動—自分たちで戦いを生み出しておきながらもその責任を「マヂエル様」に転嫁するような祈り—を続ける。問題は、この〈善意〉である。

5 〈地動説〉を有さない者の祈り

祈りの中で大尉は「何べん引き裂かれてもかまひません」とは言っているが、それによって自分の生が閉じられてしまうことには限りない恐怖を持っている。また、この言い回し（「一て（で）もかまひません」）は賢治の作品には多く用いられる表現であり、中でも同じように星に向かって「灼けて死んでもかまひません。」と何度も言いながら救いを求めた「よだかの星」のよだかの姿を思い

¹⁰ ちなみに、「マヂエル」はギリシャ語で「おおぐま座」を意味する「ウルサ・マジョール」の「マジョール」をもじったものとされている。また、前半に出てくる「マシリイ」は同様に「水星」を意味する「マーキュリー」をもじったものである。そのため、ここでは星と表記しているが、正確には「マヂエル様」は星座である。

¹¹ 安藤(1997)p.17

起こさせる。よだかにしても、〈自己犠牲〉の観念を持ち出しながらも、そもそも星に引き上げてくれと願った理由はたくさんの虫を殺してしまう自分の罪深さではなく鷹に殺されてしまうことのためである。よだかは、そのような殺しの連鎖の存在しない「世界」つまりそうした「世界」を超越する星の「世界」へと行くことを望んだ。

しかし、星に引き上げてもらってそうした弱肉強食の食物連鎖から逃れようと、懸命に星々をお願いをして回るよだかは、ことごとく拒否される。最後によだかを夜空に引き上げた正体は明かされていないし、ここではそのことについて考察を深めるといった回り道はしないが、重要なのはただ星に祈ったり願ったりしていただけたよだかに対して、すぐに手をさしのべる星はいなかった、ということである。最終的に、意識的か無意識的かということとは不明ではあるが、よだかの生、よだか自身の「世界」が一変する契機となったのは、よだか自身の行為である。

何とかしようと自分で行動しなければ、事態は何も変わらない。少なくとも、このままの状態を祈り続けたとしても、自分で何か直接改善に向かうような行動に出ない限り、鳥の大尉の「世界」が好転することはない。先述のように、彼はそれを故意に怠っているのではない。ただ、そうする術を、そうすることそのものを、知らないだけなのである。自分が動くことによって「世界」が動くのだということ、「世界」を動かすには自分が動かなければならない、という事実を知らない。その〈無知〉ゆえに、自分の意志、思いを実現させる方向での行動にうつることができない。

以上のような状態にありながら、大尉は祈り続ける。そこに、先に述べたような大尉の〈善意〉が存在しているのである。〈善意〉ということばは、一般的には「①他人や物事に対して持つ、よい感情・見方。」¹²という意味として認識されている。「どうか憎むことのできない敵を殺さないでいゝやうに早くこの世界がなりますやうに…」という大尉のことばは文字通り見れば、「この世界の平和のために」という善良で立派なものとして捉えることができる。しかしもうひとつ〈善意〉ということばには「②法律関係の発生・消滅・効力に影響するようなある事実を知らないこと。」¹³という意味も含まれる。もちろんここでは法律という人間の作成したものが登場することはないが、大尉は、自分が動くから「世界」が動くのだという、重大な事実を知らないために、良かれと思って、戦いと祈りを繰り返すのだという意味でも、その行為全てが〈善意〉なのである。

吉本隆明(1978)は、「よだかの星」のよだかや「狼森と策森、盗森」の森の住人たち、「銀河鉄道の夜」の鳥捕り、「祭の晩」の山男などを例に挙げながら、宮沢賢治の作品に多く出てくる「弱小なもの、さげすまれているもの」の〈善意〉や〈無償〉¹⁴の存在について論じ、「〈善意〉や〈無償〉の行為は、行為するものが弱小であり、ないがしろにされているときにだけ均整がとれるものだ」¹⁵という賢治の思想を導いた。挙げられている「弱小なもの」たちは皆、今述べてきたような大尉と同じある何かの事実を知らないからこそ「弱小」なのである。

鳥たちの〈無知〉を際立たせる最も大きな装置が、〈地動説〉を有する人間の姿を潜ませることによって彼らが〈地動説〉を持たない存在だと示した先の月夜の場面だった。天が動いて見えるのは実際に天が動いているのではなく鳥たちが足をつける地球、つまり自分たちが動いているからそう見えるのである。〈地動説〉を持たないというその鳥たちの姿は、鳥たちが「弱小なもの」として抑圧される原因そのものであるということの隠喩として捉えることができる。そうした「弱小」な

¹² 『岩波 国語辞典 第7版』p.817

¹³ 『岩波 国語辞典 第7版』p.817；傍点稿者

¹⁴ 吉本(1978)p.16

¹⁵ 吉本(1978)p.16

彼らが、何ものかに抑圧されたような格好でありながら今度は山鳥という相手を抑圧するかのよう
に襲撃を行う。その時、ただ「お腹が空いて」ただで戦いの意志があったかどうかもさだかで
はない、子どものように本当に何も（襲撃されるかどうかということさえも）知らないかもしれな
い（無知）な相手を殺そうとする。その意味で、大尉たち「鳥の義勇艦隊」は中途半端な存在であ
る。つまり、国語の習得という観点から見た時に、彼らが「ギイギイ」「があがあ」「かあお」など
の（鳥語）を大砲として用いながらも（＝イリテラシー）人間が用いるような体系化された（こと
ば）を用いてコミュニケーションを取っている（＝リテラシー）というところにも現れているよう
に、中途半端にイリテラシーな存在なのである。そうした（地動説的思考）を持ち合わせていない
という、生きることにおいて決定的な事実を知らないということが、彼に身動きを取ることのでき
ない状態、つまり存在しているかどうかとも疑わしいような何ものかに抑圧された状態を永遠に続け
させてしまう。

戦いを止める根本的な解決に向かうことなく現状維持を続ける大尉の態度は、小沢俊郎(1954)に
よって「判断中止的」であり「賢治ほどのヒューマニストとしては肯い難い」¹⁶とも評されており、
吉本も大尉の祈りに対しては以下のような否定的な姿勢を取る。

（善意）や（無償）から宗教的な倫理や自己犠牲にと流れてゆく通路は、かれ（宮沢賢治：
引用者注）が心弱かったときに早急にいつも駆け抜けてゆく通路であった。そしてこれが感性
の自然融着と拮抗して、宗教的な教訓家の共感と超近代主義者の黙殺をかってきた。宮沢賢治
のもっとも通俗に流れたところだからである¹⁷。

つまり大尉の、「マヂエル様」という超越的存在に対する信仰心や（自己犠牲）の観念は、賢治の
心弱さの露呈だと彼らは批判するのである。そのとらえ方は、長く「鳥の北斗七星」の評価を低め
る原因ともなってきた。しかし賢治は、「心弱」くて知らず知らずのうちにそうした流れをつくりだ
したのではないのではないか。むしろ、艦隊の中では極めて優秀な存在として見なされているとい
う描写とその艦隊そのものが何ものかに抑圧されているかの状態にあるという描写を巧みに散りば
めることで、「弱小なもの」という抑圧される最大の原因と考えられる、ある決定的な事実を知らな
いこと＝イリテラシーという（善意）の姿を、意識的につくりだしているように感じられる。

ただし「鳥の北斗七星」には、そこにリテラシーを持つ者（ここで言えば、「世界」を動かすた
めには自分たちが直接何か行動を起こさなければならないということを知っている者）が介入する
ことによって彼らの哀れな姿を浮き彫りにすることなく、物語は終始する。西成彦(2004)は、ポ
ストコロニアリズムの観点から、「どんぐりと山猫」から「鹿踊りのはじまり」まで、イーハトヴ童
話は、形を変えながら、ニンゲンと異類のあいだの戦争、もっぱらそればかりを語ろうとした、そ
れはきわめつけの戦争文学だったのでないだろうか¹⁸としながら、以下のように指摘する。

たわいもない行き違いが相互を傷つけあう物語。冷戦を解くための可能なかぎりの方法を宮
沢賢治は試みるのだが、正しい解決法はどこにもない。少なくとも宮沢賢治は性急に答えを求

¹⁶ 小沢(1954)；『宮沢賢治必携』p.101より

¹⁷ 吉本(1978)p.26

¹⁸ 西(2004)p.131

めようとはしなかった¹⁹。

「鳥の北斗七星」における鳥と山鳥は「ニンゲンと異類のあいだの戦争」ではなく、同種間であるにも関わらず、お互いの〈無知〉とそれを含めた〈善意〉ゆえに戦いを繰り返す。しかし、助けしてくれるはずもない星に祈りを捧げるだけで、根本的な解決へと向かう糸口は示されない。ここではただ淡々と、抑圧される者が持つ〈善意〉の危うさを、鳥と星々のスケッチの中に埋め込む形で語られるのみである。

6 なぜ鳥と北斗七星だったのか

〈地動説〉を持たない、つまり〈天動説〉のみを持つ鳥たちにとって、星は空という平面な〈地〉で動く存在である。動くということは、星々は彼らにとって生命を持つ存在だともいえる。だからこそ彼らは、「マヂエル様」という星々に意志を見いだし、自分たちの置かれている状況の意味をそこに存在させるという事態をつくりあげてしまう。つまり、鳥たちにとっては、天は動くもの、星は生きているものである必要があったし、そのようにしか見えないものである。そしてそもそも、彼らはそれを覆す〈地動説〉を持たないため、〈天動説〉は彼らの「世界」の形成の前提だった。

萬田務(1979)は、「冬の景色—すべてのものを包んでしまう大量の雪とそこに舞いおりた鳥」²⁰という「心象スケッチ」こそがこの作品で描かれたものだと言及することで、「鳥の北斗七星」において「戦争そのものは素材」²¹にすぎないという再評価を試みた。そうした方向での論は管見の限り他には見あたらず、萬田の論はかなり特異な存在ではあるが、他の論においてさほど重要視されてこなかった、萬田の指摘する冒頭の「冬の景色」も、これまで論じてきたことと結び合わせると重要な要素のひとつであるということが分かる。つまり、「鳥の北斗七星」の中では「石ころのやうです。胡麻つぶのやうです。また望遠鏡でよくみると、大きなや小さなのがあって馬鈴薯のやうです。」とは書かれているものの、雪の中にぼつぼつと舞いおりた鳥は、まるで夜空の色を反転させたような雪という〈地上の夜空〉に浮かぶ黒い星の群れであり、また夜空に浮かぶ数々の星は、真っ白な雪の色を反転させたような〈天上の雪原〉に舞いおりた輝く鳥の群れなのである。双方を遠くから見た時、両者はあたかも、色の反転をとまなう映し姿だといえる。

鳥の艦隊が不規則な数で飛び立って移動するように、星々は不規則に形成された星座という集まりとして移動する。ただ違うのは、雪と夜空の色の反転だけでなく、真っ黒な鳥たちに対して色とりどりの、星々の輝きである。赤祖父哲二(1989)は、賢治作品に描かれる星々の輝きについて以下のように述べる。

宮澤賢治の作品にはいうまでもなく、星がさまざまな宝石のように色とりどりに輝いている。地上のほとんどの宝石の輝きは、粗い原石から人間の手によって磨きだされる。金剛石がよい例である。これにたいして、星座にちりばめられた天の宝石は、髪にあたえられたそのままの光を、宇宙創造の日から保っている。星は宝石のようだというよりも、宝石そのものだったほうがよい²²。

¹⁹ 西(2004)p.143

²⁰ 萬田(1979)p.60

²¹ 萬田(1979)p.60

²² 赤祖父(1989)p.64

〈天上の雪原〉で宝石のようにきらきらと瞬く星々。鳥たちは、天上に自分たちの似姿を映し出ただけでなく、その色とりどりの輝きにどれほどの強いあこがれを抱いていたのだろうか。『イソップ童話』に登場するカラスは、まわりの色とりどりの鳥たちの美しさをうらやましく思い、彼らの色彩豊かな羽を少しづつ盗み自分の体に取り付けることで美しさを偽造し、鳥の王様になろうとした。博学な賢治がその童話に触れていた可能性は否定できないだろうし、彼自身が星々の輝きと色彩に魅了された者の一人であることは間違いない。同様に、その輝きと色彩に鳥たちが希望を見だし、あがめる対象とすることも、ごく自然なことのようと思われる。

ではなぜ、天体で輝くあふれんばかりの星々の中でも、北斗七星という星座だったのか。彼らにとって、まず向こう（星）が動くということはそこに生命を見いだすために必須のことであった。さらに、常に自分たちを見守ってくださる存在であるということも重要だった。その条件を満たすのが、1年を通してほぼ毎日観測可能で、なおかつ北極星を中心としながらも夜空を動く、つまり生命を持つ存在である北斗七星だったのである。信ずるものとは、自分と似た姿で（実際両者は似ていないが、似姿として見えるという意味で）なおかつ自分には持ち得ない要素を有し、そして常に見ることのできる安定をそなえた対象なのかもしれない。星が見えない昼間でさえ、大尉は「マヂェルの星が、ちやうど来てゐるあたりの青ぞら」にうらうらと湧く「青いひかり」を見る。それは、夜になっていつ見上げてもらいたい北極星の近く—真北の空あたりにいてくれる、という彼の北斗七星に対する安心感を表しているといえる。

そして大尉の祈りの中にある「憎むことのできない敵を殺さないでいゝやうに早くこの世界がなりますやうに」ということば、つまり自分の「世界」が平穏なものに変わりますやうに、という願いには、以上のような〈天上の雪原〉という戦いのない平穏な「世界」に行きたいという思いも含まれていたかもしれない。まるで鷹に殺されることを恐れ「どうかわたしをあなたの所へ連れてって下さい」と願った「よだかの星」のよだかのように、「いてふ」の家族が離ればなれになることに不安を感じる中で「僕はきつと黄金色のお星さまになるんだよ」と言った「いてふの実」の男の子のように。だからこそ月が出た夜に、まるで鋼の空に「裂罅」が走ったように見えた鳥たちは、自分たちの心よりどころとする平穏な天上の鳥たちが「いくつか聯合して爆発をやり」、その間にも「裂罅」という戦いが起きたような事態に得も言われぬ不安と恐怖を感じたのかもしれない。〈天上の雪原〉に、戦いが起こってはならないのである。

7 「鳥の北斗七星」探求から学ぶもの

7-1 自分自身の読みの過程

初めて読んだ時のことをよく覚えている。「鳥の北斗七星」というタイトルを見て、「きつと星の話なんだろう」と思いながら読み始め、2文目に出てくる「義勇艦隊」のことばを目にするやいなや即座にその期待は裏切られ、「違う、これは軍隊の話だ」という思いに変わったまま一度本を閉じてしまった。そして再び本を開き、「義勇艦隊」という一語に引き寄せられたまま鳥の大尉と許嫁との会話を追いながら、婚約者を故郷に置いて確実に死が待っている戦地へと赴く第二次世界大戦中の特攻隊員の姿を思い浮かべた。その印象は読み終わる最後まで頭の中をただよい離れることはなく、この「鳥の北斗七星」は「結局戦争の話だった」というどこか物足りなさをともなう感想を持って本を閉じた。さらにこうした感想は、佐々木という特攻隊員の手記の存在とそれを支持した上

での澤井繁男(2007)の「愛国心」論²³とで出会うことによってますます強められると同時に、ひとつの疑問を生み出した。果たして本当に「戦争の話だった」のだろうか、という疑問である。

「愛国心」へと回収されていく流れのみに触れた時点では、そうした疑問を抱きながらもおそらくそれが「鳥の北斗七星」の読みとして最もふさわしいものだと思っていた。その読みが〈唯一絶対の正解〉のように感じられたのである。しかし、その他の先行研究において表明された様々な意見を目にする中で、初めて「鳥の北斗七星」の読みの多様さを知ることになる。その多様性を知ることによって、自分の抱く違和感や疑問の存在意義を自分で認めることができる。そして再び思考は活性化され、再読の段階へと移り進み、自分の納得のできないと思う箇所に関する探求が始まったのである。

初読の段階では「戦争」や「反戦」の意図があまりにも直接的すぎると感じたが、再読を試みる過程で、それらに駆動される戦争の是非を訴えるための文章にしては逆にあまりにも不必要なのではないかと思われる箇所が多く点在することに気づかされる。それが冒頭で述べ、本稿の中で取り組んできた、〈読む中で生じた数々の疑問〉である。その中でも、最も強烈でありあまりにも不気味な印象を持っていたのが、月夜の鳥たちの様子だった。他の場面に対しても、月夜の鳥たちは浮いた存在であり、それこそ不必要ではないかと感じるほどだった。しかし、不必要に見えるものの存在意義を自分なりに納得できる形で確かめることこそが、最初に抱いた物足りなさ、違和感を解消させる糸口となるのではないかと思うのである。

そうして始まった「鳥の北斗七星」探求は、次第に鳥の大尉の〈地動説〉を持たないというイリテラシー、それに起因される〈善意〉の戦いと祈りという姿を浮き上がらせてきた。そしてそれらが行き着いた先は、大尉の〈善意〉の行為を成り立たせるために必要不可欠なものとして存在する、初めてタイトルを目にした時に期待した美しい星々の世界だったのである。普段から星を眺めることを好み、星を数えて知った星座を見つけてはそこに投影された神話の数々を思い出したり、星座や星の名前をひとつひとつ声に出すことに喜びを感じる身として、星々の世界へと思いが及び始め〈地上の夜空〉と〈天上の雪原〉に浮かぶ星々が映し出された時には胸が躍る思いすらした。一言で表現してしまうことに危険さを感じつつも、「鳥の北斗七星」は「やはり星の話だったのだ」と実感した瞬間である。

また、本考察の中では滑稽とも取れるような大尉の〈善意〉の姿は、自己犠牲という観念をともしながら信仰対象にただ依存してしまい根本的な解決へと向かう行動を停止させてしまう。それは、どうにもならない抑圧に対する諦念や自己犠牲を美学としてしまうことの危うさをつきつけるものであり、そうせざるを得ない大尉たちのイリテラシーという「弱さ」を露呈する。そのことを、読者として自分の身と重ねながら反省の念も込めつつ読み込んだ結晶として形になったものが、本考察だともいえる。

そのように考えると、ここでは「鳥の北斗七星」は〈善意の話〉でありそれを成り立たせるための〈星々の話〉だったのではないかと結論づけることができる。しかしそのように表明してしまうことは、〈戦争の話〉として読み込まれてきた「鳥の北斗七星」の歴史そのものを否定してしまうことのように捉えられかねない。決してそれは本意ではなく、ただ単に、そうした〈善意〉やそれを支える〈星々〉という姿を生み出す大きな〈抑圧〉として自分自身の中に想起されるものが戦争というモチーフではなかったということを意味している。おそらく最初に抱いた違和感やもの足りなさ

²³ 澤井(2007)より

さはそこに起因するのだろう。今この時に「鳥の北斗七星」を読む中で想起された関心事として、〈星〉や〈善意〉が姿を現したというだけである。どう考えても戦争が現在の最大の関心事にならざるを得ないような佐々木の読みが「世界大戦への積極的参加」として結晶化されたことに、ここではどのような批判も加えることはできない。そしてそれは単純に時代や社会情勢の移り変わりのみに左右されるものでもない。違和感を抱くきっかけとなった澤井繁男の論が佐々木の読みに寄り添うような形で「愛国心」に思いを巡らせたことも、決して「古い読み」や「間違った読み」（誰もそのようなことは指摘していないが）と見なすことはできない。彼が、8月という終戦と原爆を想起させる夏が近づいてくるにあたり、かの世界戦争に思いを巡らせる中で「鳥の北斗七星」と再会したことを考えるならば、佐々木の読みに寄り添うのは至極当然の流れのように思われる。だからこそ、冒頭で述べたように「鳥の北斗七星」が〈戦争文学〉かそうでないか、という二者択一的な議論は意味をなさないという論に共感を覚えたのである。

このように、最初に抱いた〈違和感〉は様々な先行研究の意見に触れることによって〈疑問〉という形を与えられ、ひとつひとつの〈疑問〉に取り組む上でそうした先行研究という外側の意見を参考にしながら考え進めてきたことが分かる。それらの意見との葛藤を繰り返しながら、自分自身の読みは編み上げられていき、その結果として「鳥の北斗七星」に対峙する自分自身の、〈星〉や〈善意〉という現在の最大の関心事が浮き彫りとなったのである。

7-2 立ち現れる〈多様性を重視する文学教室〉の姿

初読から自分自身の読みを確立するまでに経た以上の過程は、文学作品を読む教室において様々な意見が交わされる中でひとりひとりの読みと読みが刺激し合い、それぞれの読みを深めていく過程と類似した現象であると考えることができる。ひとつの作品を読み、個々の子どもたちは自分の中で生成されるもやもやとして形にならない思いを抱くことだろう。その思いの正体は一体何なのか。その思いを生じさせる要因は一体何で、自分はその作品のどこに無意識に心動かされているのか。作品の中のどこに共感し、どこに謎や違和感を抱えるのか。

それらの答えを求めると、ただひとつの意見だけに触れると、あたかもそれが〈正解〉であるかのように受け止められ、思考は停止してしまう。それが教師から与えられたものならば尚更である。本考察での経験からいえば、それが「先行研究」という自分の読みよりもはるかに正しいもののような権威を持ったただひとつの存在として読みの過程に介入したために、その流れに沿って読むことが唯一絶対のような錯覚を引き起こしたのだと考えられる。当然、教室において教師が提供するだろう教師自身の読みも、ここで出会った「先行研究」も、何らかの問題意識を持って作品に誠実に向き合った結果として生成されたものという意味で、その正しさは確かなものである。重要なことは、それが唯一絶対の正しさというわけではないということを知らなければならないということである。

Louise Rosenblatt は、「読む行為」について以下のように示している。

テキストを読むことは、読者の生活史（ライフヒストリー）における、ある特定の時間にある特定の環境である特定の瞬間起こるひとつの出来事なのである。その交流は、読者の過去の経験だけでなく現在の状態や現在の興味、最大の関心事をも含むだろう。これは、ページ上の印刷された印は違う読者との交流の効力によって異なる言語記号にさえなるかもしれないと

いう可能性を持っている。²⁴

特定の作品を読んだ読者それぞれが抱くであろう形にならない思いが、上記で示されているような「読者の過去の経験だけでなく現在の状態や現在の興味、最大の関心事」に多大な影響を受けているものだとすると、それぞれが持つ疑問や納得できないと思う箇所、つまり〈問い〉は個々人によって異なってくる。それが、読みの多様性を生む契機となるのである。しかし、山元隆春(2010)が「読者の興味・関心を強調しすぎると、文学の授業そのものが情緒主義に流れてしまいかねないという危惧や、読者の興味・関心を重んじるだけではその文学作品を授業においてきちんと読んだことにはならないのではないかという疑問が提出されたことも確かである」²⁵と指摘するように、異なる意見のどれをも吟味することなく「違う読みがたくさん提出されて良いね。」と確認するだけで終わってしまうと、ここでもまた思考の活性化は生まれにくい。

今回の考察にあたって取り上げたそれぞれの論者は、「こう読みたい」「この箇所が気になる」「これが大事」という自らの信念を証明するため、その論文の読者である私たちに説得するかのように読みを展開する中で、彼ら自身の思考を徐々にまとめあげていっただろうし、稿者自身も先述のようにその過程を経ている。そして、誰がどう論じようと、今回であれば「鳥の北斗七星」論の終了は告げられることなく、満場一致の可能性はほぼゼロに近い状態で議論は続けられてきており、これからも続けられるはずである。稿者自身このように作品そのものを論じることがほぼ初めてに近いものであり、不安やとまどいを隠すことはできなかった。それはおそらく、自分の読みが新しいものであり得るのか、オリジナルのものであり得るのか、間違いを起しはしないか、といった念にとらわれていたことから来ているのだろう。その感覚がつかめないまま見切り発車をしてしまい、思考をその一歩先に進ませることを恐れていたのだと思う。考察を試みることによって、次々に新しい読みが提出されていくという文学の世界に触れ、そのような世界にこれまでひっそりと抱いていた違和感を自分の中で少しは払拭できたと実感している。

大事なことは、自分の〈問い〉を信じ、他の意見を聞きながらその〈問い〉に答えようと努めることである。その時点で、「先行研究」という他の意見が持つ〈問い〉と自分が抱く〈問い〉との立場は同等に並ぶ。そして、初期の段階で生じた形にならないもやもやとした思いは一部ことばを与えられ、ことばを与えられることによって新たな思考が生じ、新たな〈問い〉が生まれる。そうした〈問い〉にぶつかることで新たな可能性を導き出しながら、最終的に、自分はなぜこのような読みを生み出すに至ったのかということに思いを巡らせることになるのである。それは、「文学作品を読むという体験が、学習者にとって現実を見すえ、考え、葛藤していく起点になると考える立場に立つ考え方」²⁶に通じるものである。

こうした協同的な思考の活性化が生じるためには、同様に子どもたちが自分自身の違和感を認め、そこから生まれる〈問い〉の正当性を信じることを前提として他の意見との交流を持つ必要があるだろう。思考の活性化とは、まず自分自身の考えたこと感じたことを自分で認めることから始まり、自分で肯定しようとし、さらにその正当性を何とかして相手に理解してもらおうとすることで発展するものである。それは教室において文学の読みを交流することだけでなく、研究を進める上でも

²⁴ Rosenblatt(1978)p.20

²⁵ 山元(2010)p.75

²⁶ 山元(2010)p.77；こうした文学教育をめざしたものの代表的なものとして、荒木繁の「問題意識喚起の文学教育」や大河原忠蔵の「状況認識の文学教育」などが挙げられる。

同様のことがいえるはずである。対象物に何らかの問題意識を抱いているにも関わらず、自分は無力であると決めつけることでその問題解決を端から諦めてしまつては、事態は何も改善しない。それは、何ものかに抑圧されているかのように見せて自分の無力さを「祈り」によって美化し、決して自分自身の手で行動を起こすことのない鳥の大尉と同じ状態である。研究対象に取り組むひとりの研究者である私たちと、教室で文学作品に対峙するひとりひとりの子どもたちは大尉であつてはならない。自分自身の〈問い〉の種となる感情や考えを肯定し、他と意見を対等に交わし合うことによってこそ、研究対象に関する知見や特定の文学作品の読みが深まっていく過程を生じさせる。その過程の中に、〈多様性を重視する文学教室〉の大きな教育力が存在しているのである。

以上のように「鳥の北斗七星」の大尉の言動を、文学作品の協同的な読みの過程や研究に携わるものに通じる在り方と結び合わせることでそのものが、稿者自身の「現在の最大の関心事」に刺激を受けた読みがここに成立しているということを表しているのだといえる。

8 文献一覧

ROSENBLATT Louise (1978) *the Reader, the Text, the Poem*, Southern Illinois University Press

赤祖父哲二(1989)『宮沢賢治 光の交響詩』六興出版

安藤恭子(1997)「〈宮沢賢治〉の表現をめぐって—「鳥の北斗七星」における擬人法」『日本語学』16(10) 明治書院 pp.10-18

大島丈志(2003)「宮沢賢治「鳥の北斗七星」を読み直す—戦いと泪の視点より」『賢治研究』(90) 宮澤賢治研究会 pp.4799-4813

小川俊郎編・伊藤真一郎(1980)「賢治童話辞典」『別冊國文學 No.6 宮沢賢治必携 '80 春季号』(佐藤泰正編) 学燈社 pp.85-161

草下秀明(1975)『宮澤賢治研究叢書 宮澤賢治と星』学藝書林

千田洋幸(1998)「宮沢賢治「鳥の北斗七星」と戦争のディスコース」『学芸国語国文学』(30) 東京学芸大学 pp.70-78

西成彦(2004)『〔新編〕森のゲリラ 宮沢賢治』平凡社

西尾実・岩淵悦太郎・水谷静夫編(2009)『岩波 国語辞典 第7版』岩波書店(初版1963年)

佐々木八郎手記(1959)『きけ わだつみのこえ』(日本戦没学生記念会編) 光文社

澤井繁男(2007)『「鳥の北斗七星」考 受容する“愛国”』未知谷

萬田務(1979)「宮沢賢治童話集『注文の多い料理店』試論」『橘女子大学研究紀要』橘女子大学 pp.36-65

山元隆春(2010)「文学教育の研究」『新訂国語科教育学の基礎』溪水社

吉本隆明(1978)「賢治文学におけるユートピア」『国文学 解釈と教材の研究』23(2) 学燈社 pp.6-29

*注記のない引用は、童話を『宮沢賢治全集8』『宮沢賢治全集5』(1986年、ちくま文庫)により、短歌を『校本 宮沢賢治全集 第一巻』(1973年、筑摩書房)によった。[]は全集における校訂箇所を示しており、ルビは全て削除している。

*本考察は、第20回CoLP(Community of Literacy Practice; 広島大学リテラシー実践共同体)月例会(2012.1.28 於: 広島大学東千田キャンパス)において発表した資料を基に、その際行われた討議を参考にして加筆・修正を行ったものである。討議の中で、山元隆春先生を始め参加者の方々には貴重なご意見をたくさんいただいた。記して厚く感謝申し上げます。

(広島大学大学院博士課程後期3年)